

一一八五三

玄語

一一八五四

日本 鎮西 三浦 菅 安貞 著

一一八五五

小冊 物部大小

一一八五六

大物

一一八五七

天なる者は精なり、時を經にし、處を緯にす、

一一八五八

物なる者は麁なり、神は經に通じ、物は緯に塞る、

一一八五九

神は體無し、體を物に於て露す、

一一八六〇

物は主有り、主を神に於て見す、是を以て。

一一八六一

天地は物にして立つ、

一一八六二

天神は氣にして活す、

一一八六三―一六四

天地は大なり。偏を立てて一を全す。一の全にして成る、

一一八六五―一六六

二の偏にして立つ、偏は成具を立てす。

一一八六七

一一は網縊す。網縊は物を化す。小は大に散ず。

一一八六八

剖析して散ず、

一一八六九

對待して偶す、

一一八七〇

統散有りと雖も。而も同じく物を爲すなり。

一一八七一

物なる者は。天地なり。

一一八七二

天地は相い得て。物は能く全たり。是を以て

一一八七三

小なる者は大の含む所と雖も。而も

(PB 125)

- 一一八七四 各おの天地を全す。同じく彼此の勢を張る。夫れ
- 一一八七五 天地は體にして成る。
- 一一八七六 象質は性にして成る。
- 一一八七七 成具は偏を合す、
- 一一八七八* 大物は一を全す、
- 一一八七九 神は活して用す、
- 一一八八〇 物は立して體す、
- 一一八八一 轉は外を保す、
- 一一八八二 持は内を運す、
- 一一八八三 實は止して體を持す、
- 一一八八四 虚は動して地を化す、
- 一一八八五 大物の核子は、潤濁の體を以て、
- 一一八八六 天なる者は、一氣の本幹なり、
- 一一八八七 乾清の氣を以て、熱を聚めて明を播す、
- 一一八八八 明熱は聚まれば則ち火なり、解れば燥にして能く煦む、
- 一一八八九* 暗寒は散ずれば則ち影なり、結べば則ち水にして能く液す、
- 一一八九〇* 燥は物を煦む、燥中は火を發す、
- 一一八九一* 水は物を液す、水外は溼を解く、
- 一一八九二 日月景影は、上に旋轉す、

- 一二八九三 水火溼燥は、下に網縊す、故に
- 一二八九四 物は一圓球を露し。地は結び天は散ず。
- 一二八九五 性體の物は、没露隠見す、
- 一二八九六 經緯の氣は、運轉噀喻す、
- 一二八九七 火は發し水は收む、
- 一二八九八 氣は升り質は降る、
- 一二八九九 其の氣は則ち鬱發達斂。凝融肅舒す。
- * 一二九〇〇 天の處を爲す者は、則ち景影なり、星辰は象を其の間に鋪く、
- 一二九〇一 地の處を爲す者は、則ち水燥なり、雲雨は質を其の中に散ず、
- 一二九〇二 天時は上に行す、
- 一二九〇三 歲運は下に旋る、
- 一二九〇四 日は轉じ影は追う、
- 一二九〇五 水は滋い燥は煦む、
- 一二九〇六 色を成す者は、更るがわる晝夜を行す、
- 一二九〇七 氣を爲す者は、代るがわる冬夏を爲す、
- * 一二九〇八 地は拗突して山水を列す、
- 一二九〇九 氣は動止して風恬を爲す、
- 一二九一〇 端を南北に奉して、而して地の兩極を定む、
- * 一二九一一 線を東西に環して、而して地の中線を分つ、

- 一二九一二 然り而して物と我と。能く其の中に遊ぶなり。故に
- 一二九一三 天なる者は、清浄の府なり、
- 一二九一四 地なる者は、穢濁の藏なり、而して
- 一二九一五 其の穢濁の中は、處を水陸に分つ。
- 一二九一六 水なる者は地に居る、
- 一二九一七 陸なる者は天に居る、
- 一二九一八 天中は、氣 守れば則ち恬なり、雲雨は茲に路す、
- 一二九一九 氣 旋れば則ち風なり、会晴は茲に任す、
- 一二九二〇ー一二一 同じく是れ一氣なり。動なれば則ち鹿も能く横旋す、
- * 一二九二二ー一二三 静なれば則ち能く豎立す、風恬の成る所なり。
- * 一二九二四ー一二五 静なれば則ち能く豎立す、故に升降なる者を容れて、而して能く此に路す、是を以て
- 一二九二六 雲は之に従いて升る、
- 一二九二七 雨は之に従いて降る、
- 一二九二八 升は降を碍げず、以て恬の静を觀る、
- 一二九二九ー一三〇 鹿なれば則ち能く横旋す、故に縦横は相い拒みて、而して物を己に靡かす、故に
- 一二九三一 或いは雲雨を率いて縦す、
- 一二九三二 或いは雲雨を率いて横す、
- 一二九三三 縦は横を容れず、以て風の鹿を觀る、
- 一二九三四 地なる者は天に資る、故に天の有する者は、地能く之を有す、

(PB 127)

(I 515b)

- 一二九三五 天なる者は、地と竝立す、故に
- 一二九三六 一の有する者は一能く之を反す、是の故に
- 一二九三七 持の風恬に於るは、猶お天の轉持に於るがごとし、是を以て。
- 一二九三八 其の天に大なる者は、地に小なり、
- 一二九三九 地に大なる者は、天に小なり、
- 一二九四〇 天なる者は、動の分なり、故に動は天より大なり、
- 一二九四一 地なる者は、靜の分なり、故に恬は地より大なり、
- 一二九四二 大小有り、雖も、亦た各おの之を有す。故に
- 一二九四三 氣は持中に動きて風を爲す、之を天の轉に比すれば則ち微なり、
- 一二九四四 質は持中に止りて恬を爲す、之を天の極に比すれば則ち大なり、
- 一二九四五 動靜なる者は、虚實の用を爲す所なり。氣體は各おの之に由る。夫れ
- 一二九四七 持中の事。風恬は猶お轉持のごとし、
- 一二九四八 雲雨は猶お日月のごとし、
- 一二九四九 天は質を容れず、乾燥は性を爲す、故に象熱にして乾燥す、
- 一二九五〇 乾燥は性を爲す、故に象熱にして乾燥す、
- 一二九五一 轉冷にして乾燥す、
- 一二九五二 地は象を主とせず、潤溼は物を結ぶ、故に質冷にして潤溼す、
- 一二九五三 潤溼は物を結ぶ、故に質冷にして潤溼す、
- 一二九五四 持温にして潤溼す、是を以て。
- 一二九五五 月は水に似たると雖も、而も地水の潤溼に於て異なる、
- 一二九五六 火は日に似たると雖も、而も天日の乾燥に於て異なる、故に

- 一二九五七
- 一二九五八
- 一二九五九
- 一二九六〇
- 一二九六一
- 一二九六二
- 一二九六三
- 一二九六四
- 一二九六五
- 一二九六六
- 一二九六七
- 一二九六八
- 一二九六九
- 一二九七〇
- 一二九七一
- 一二九七二
- 一二九七三
- 一二九七四
- 一二九七五
- 一二九七六
- 一二九七七

豎氣は溫潤にして、雲を升し雨を降す、其の氣は濁なり、
 横氣は冷燥にして、念を招き晴を致す、其の氣は清なり、是の故に。
 植なる者は止質、故に其の氣は冷なり、枯るれば則ち溫なり、
 動なる者は動質、故に其の氣は溫なり、死すれば則ち冷なり、
 持中は、體の止るは則ち陸なり、燥生は之に居る、
 體の動くは則ち水なり、水生は之に居る、

(PB 128)

雨水は積りて海を爲す、
 土石は積りて山を爲す、此の故に
 海に在りて鹹を釀もす者は、水底の氣なり、
 陸に在りて液を化する者は、地面の氣なり、
 液を化して氣を疏する者は、陸中の水なり、
 流を積みて氣を鬱する者は、海中の水なり、
 水陸の生は、之を動植と謂う。夫れ日月星辰の常に其の體を持し、
 雲雨動植の毎に其の體を換るは、
 精麤の然ら使むるなり。

(I 516a)

日影は明暗を布く、
 水燥は乾潤を布く、
 天物は明暗を以て其の處を爲して居る、
 地物は乾潤を以て其の處を爲して居る、
 明は、景なり、

- 一二九七八 暗は影なり
- 一二九七九 潤は水なり
- 一二九八〇―八一 乾は燥なり、而して
- 一二九八一 乾なる者は天に之く
- 一二九八二 暗なる者は地に歸す
- 一二九八三 景影は氣を會易に分つ
- 一二九八四 水燥は性を會易に分つ
- 一二九八五 天なる者は、乾燥光明の處なり
- 一二九八六 明暗を相い分つと雖も、而も天に懸る者は、虚動を以て乾燥光明なり
- 一二九八七 地なる者は、潤溼暗澹の處なり
- 一二九八八 乾潤を相い分つと雖も、而も地に著る者は、實重を以て潤溼暗澹なり
- 一二九八九 天物なる者は、常に一體を持し、循環を以て其の期と爲す
- 一二九九〇 地物なる者は、毎に其の體を換え、鱗比を以て其の期と爲す
- 一二九九一 辰なる者は、會物なり、景中に居る、而して順逆の行は參差す
- 一二九九二 星なる者は、易物なり、影中に居る、而して順逆の行は整齋す
- 一二九九三 * 動なる者は、會物なり、天中に居る、而して能く横行す、(會物 不可解。)
- 一二九九四 * 植なる者は、易物なり、地中に居る、而して能く豎立す、(易物 不可解。)
- 一二九九五 同じく物を解結塞中に居く
- 一二九九六 同じく氣を生化通中に行す

(PB 129)

- 一二九九七
- 一二九九八
- 一二九九九
- 一三〇〇〇
- 一三〇〇一
- 一三〇〇二
- 一三〇〇三
- 一三〇〇四
- 一三〇〇五
- 一三〇〇六
- 一三〇〇七
- 一三〇〇八
- 一三〇〇九
- 一三〇一〇
- 一三〇一一
- 一三〇一二
- 一三〇一三
- 一三〇一四
- 一三〇一五

精せいは常つねに其その體たいを持じすれば、則すなわち古こは猶なお今こんのごとし、
 麿そは毎まいに其その體たいを換かえれば、則すなわち今こんは古こに非あらざるなり、
 天地てんちなる者ものは、大物だいぶつなり、
 萬物ばんぶつなる者ものは、小物しょうぶつなり、
 大小だいしょうは分ぶん有ありと雖いえども。而しかも同おなじく是これ物ぶつなり。同おなじく是これ物ぶつなれば。則すなわち
 同おなじく其その經けいの率ひきいるに從したがう、
 同おなじく其その緯いの容いるに居おる、之これを一いちに有うせらると謂いうなり。
 大物だいぶつは成具せいぐを以もつて。而しかして經緯けいゐの中ちゆうに成なる。
 成具せいぐは網縊いんぐんして。小物しょうぶつは化生かせいす。故ゆえに
 小なる者ものは、大だいの所有しよゆうなり、
 彼かれなる者ものは、此これの所偶しよぐうなり、故ゆえに
 小しょうの大だいに於おける、資とりて成なる、
 此これの彼かれに於おける、依よりて立たつ、
 小しょうの資とる所ところは、廻すなわち大だいの給あたうる所ところなり、
 彼かれの依よる所ところは、廻すなわち此これの通つうずる所ところなり、是こゝに於おいて。
 成なる者ものは我われに於おいて足たる、
 立たつ者ものは彼かれに於おいて敵てきす、蓋けだし
 成なる者ものは徒いたすらに成ならず、其その具ぐを得えて成なる、
 立たつ者ものは獨ひとり立たたず、其その與よを得えて依よる、

(PB 130)

- 一三〇一六*
- 一三〇一七*
- 一三〇一八
- 一三〇一九
- 一三〇二〇
- 一三〇二一
- 一三〇二二
- 一三〇二三
- 一三〇二四
- 一三〇二五
- 一三〇二六
- 一三〇二七
- 一三〇二八
- 一三〇二九
- 一三〇三〇
- 一三〇三一
- 一三〇三二
- 一三〇三三
- 一三〇三四

依る者は全たり、二は己に足る、

二なる者は偏たり、一は佗に待つ、故に。

立てば則ち彼此相い持す、而して一は一に依る、

成れば則ち大小並び分る、而して各一を成す、是を以て。

萬物は萬天地を有す。以て大物と勢を張る。

彼此は相い持す。而して更るがわる其の不足を瞻う。是を以て。

各散天地は。一有の中に在るも。亦た能く萬不同を爲すなり。故に。

其の大より、剖析して其の小を觀る、

其の麤より、尋繹して其の精を察す、

之を比し之を反す。以て髣髴を觀る。是を以て。

小も亦た各おの一有を發す。而して

其の徳を有す、

其の道を發す、

其の天に居る、

其の物を成す、

日影通具は、彼の衰衰に從いて、而して節序を刻す、

此れ則ち衰衰と節序とを並せて、此の時を爲す、

之に就きて始めて生じ、及ばずして便ち化す、

天地塞具は、彼の塊塊に依りて、而して方位を鋪く、

(I 516b)

(PB 131)

- 一三〇三五
- 一三〇三六
- 一三〇三七
- 一三〇三八
- 一三〇三九
- 一三〇四〇
- 一三〇四一
- 一三〇四二
- 一三〇四三
- 一三〇四四
- 一三〇四五
- 一三〇四六
- 一三〇四七
- 一三〇四八
- 一三〇四九
- 一三〇五〇
- 一三〇五一
- 一三〇五二
- 一三〇五三

此れ則ち塊塊と方位とを竝せて、此の處を爲す、

立つ所にして地を得る、

居る所にして天を得る、

物は。則ち神體を没して、而して其の氣の神を見す、

物體を露して、而して其の氣の本を隠す、是に於て。

神なれば則ち天神なり、

物なれば則ち天地なり、

神は之を爲す、

天は之を成す、

天は之を没す、

地は之を露す、

大は則ち素より之を有す、

小は則ち資りて之を有す、

成れば則ち大小は氣物を有して、而して其の勢相い張る、

立てば則ち彼此は一一を反して、而して其の勢相い敵す、

資れば則ち大に於て有する者は、皆な小に於て有す、

依れば則ち彼に於て見る者は、皆な此に於て隠る、

大物は、則ち自から中を爲して立ち、自から外を爲して居る、

小物は、中を立する地に依りて立ち、外に居る天を得て居る、

□大物

- 一三〇五四 大物は、則ち自ずから理を爲して形を成し、自ずから氣を爲して物を成す。
- 一三〇五五 小物は、則ち其の爲に理せられて形を布き、其の爲に氣せられて物を成す。是れ乃ち
- 一三〇五六 小は諸を大に資りて自から之を有するなり。
- 一三〇五七 大の立するや、佗に假ること無し、
- 一三〇五八 小の立するや、相い依ること有り、
- 一三〇五九 大なれば則ち一中に天地會易を具す、而して以て網縊す、
- 一三〇六〇 小なれば則ち天地會易に網縊せられ、而して以て一を成す、
- 一三〇六一 水は地に由て止る、
- 一三〇六二 火は賦に由て存す、
- 一三〇六三 植は水無ければ則ち生ぜず、
- 一三〇六四 動は穀無ければ則ち存せず、是れ小の佗に依りて立する所なり、
- 一三〇六五 大は能く天地會易を具す、
- 一三〇六六 小も亦た天地會易を具す、
- 一三〇六七 大は能く本根華實を具す、
- 一三〇六八 小も亦た本根華實を具す、
- 一三〇六九 大は偏を小に於て分つ、而して
- 一三〇七〇 小は大に異ならず、是れ物の各自に一を成する所なり、
- * 一三〇七一 是に於て。乾潤土石に資りて、而して氣液骨肉有り、
- 一三〇七三 神靈感運に資りて、而して心性爲技有り、
- 一三〇七四

(I 517a)

(PB 132)

- 一三〇七五
- 一三〇七六
- 一三〇七七
- 一三〇七八
- 一三〇七九
- 一三〇八〇
- 一三〇八一
- 一三〇八二
- * 一三〇八三
- * 一三〇八四
- 一三〇八五
- 一三〇八六
- 一三〇八七
- 一三〇八八
- 一三〇八九
- * 一三〇九〇
- 一三〇九一
- 一三〇九二
- 一三〇九三

會易を雌雄にす、
 天地を身生にす、
 保蓮化持。嘔噎吐納は。資りて成る、
 反して立つ、

天は精を以て、
 而して清浄にして府を爲す、
 地は麤を以て、
 而して穢濁にして藏を爲す、
 然り而して

時通處塞の天地は、
 清にして清なり、
 象循質隔の天地は、
 清にして濁なり、
 日照し影蔽い、
 燥煦め水潤おうの中は、
 濁にして浄す、
 熱蒸し水漬し、
 象起り質滅するの中は、
 濁にして穢す、
 濁中。大境は、
 則ち色性氣性、
 始めて濁す、
 小境は、
 則ち彩聲氣性、
 漸みて穢す、
 精界は末だ彩聲氣性の窺う可き有らず、
 氣麤にして後、
 彩聲氣性有り、
 麤中は浄穢を分ちて。而して

大體は浄を爲す、
 小體は穢を爲す、
 浄は色聲氣性を爲す、
 穢は彩聲臭味を爲す、

故に

(PB 133)



- 一三〇九四
- 一三〇九五
- 一三〇九六
- 一三〇九七
- 一三〇九八
- 一三〇九九
- 一三一〇〇
- 一三一〇一
- 一三一〇二
- 一三一〇三
- 一三一〇四
- 一三一〇五
- 一三一〇六
- 一三一〇七
- 一三一〇八
- 一三一〇九
- * 一三一〇一
- * 一三一〇二
- * 一三一〇三

浄中は則ち定常の氣を充たす、

穢中は則ち變化の氣を充たす、蓋し

天は清濁の素を有し、以て通隔を爲す、

象は明暗の色を有し、以て照蔽を爲す、是に於て。

物は隔に由て彩を呈す、

通に由て彩を受く、

照されて其の呈彩を見す、

蔽われて其の呈彩を隠す、

天地は動止を爲す。動く者は清虚を行る、

止る者は濁實に居る、未だ嘗て相い軋せず。

持中。氣質は相い雑す。以て鬱達を爲す。故に

氣は質に由りて鬱達す、

質は氣に隨いて激發す、間を爲し聲を爲す。

寒乾は氣 淡なり、

潤熱は氣 濃なり、

潤熱の相い醸すに。或は離れ或は著く。

(朱書欄外追記につき削除)

著く者は性を爲す、

離る者は氣を爲す、



一三一四
 一三一五
 一三一六
 一三一七
 一三一八
 一三一九
 一三二〇
 一三二一
 一三二二
 一三二三
 一三二四
 一三二五
 一三二六
 一三二七
 一三二八
 一三二九
 一三三〇
 一三三一
 一三三二

一三一四 天てんに於おいて成なる、之これを氣き性せいと謂いう、
 一三一五 人ひとに於おいて覺かくす、之これを臭しゅう味みと謂いう、
 一三一六 彩さいなる者ものは、物ぶつを持じするの氣き、之これ達たつして發はつするなり、
 一三一七 聲せいなる者ものは、質しつを持じするの氣き、之これ鬱うつして發はつするなり、故ゆえに
 一三一八 物ぶつは持じすれば則すなわち必かならず彩さいを呈ていす。是こを以もつて。
 一三一九 天地てんち日影にちえいも。亦また 各おのおの其その物ぶつを持じすれば。則すなわち黒こく白はく清せい濁たく有あり。惟ただ
 一三二〇 彼かれは定常ていじょうを爲なす、
 一三二一 此これは變へん化かを爲なす、濃中のうちゆうは精せい麁そ有あり。
 一三二二 而しかして彩さい色しきの辨べん有あり。
 一三二三 聲せいは色しきに比ひすれば。則すなわち麁そ小しょうを爲なす。故ゆえに
 一三二四 彩さいなる者ものは、物ぶつの持じする所ところ、有あらざる所ところ莫なし、
 一三二五 聲せいなる者ものは、氣きの發はつする所ところ、質しつと軋あつして發はつす、
 一三二六 故ゆえに夫らいれ雷ふう風すい火かと。金きん石せき動どう植しょくと。
 一三二七 持じせざる所ところ無なくば、則すなわち彩さいを呈ていせざる所ところ莫なし、
 一三二八 軋あつせざる所ところ有あれば、則すなわち聲せいを發はつせざる所ところ有あり、
 一三二九 潤熱じゆんねつは質しつ中ちゆうに相あい釀かもす。之これを氣き性せいと爲なす。
 一三三〇 氣きは易ようの爲ために發はつせらる、
 一三三一 性せいは含いんの爲ために畜たくわえらる、故ゆえに。
 一三三二 聲せいは物ぶつを離はなる、

(I 517b)



- 一三一三三
- 一三一三四
- 一三一三五
- 一三一三六
- 一三一三七
- 一三一三八
- 一三一三九
- 一三一四〇
- * 一三一四一
- * 一三一四二
- * 一三一四三
- * 一三一四四
- 一三一四五
- 一三一四六
- 一三一四七
- 一三一四八
- 一三一四九
- 一三一五〇
- 一三一五一
- 一三一五二

彩は物に依る

氣は質を離る

性は質を畜う

各おの精麁の分有り。彩聲氣性は。物に於て各有り。

彩は黒白より散ず

聲は清濁より散ず

氣は淨穢より散ず

性は濃淡より散ず

熱蒸し潤釀し。各物成る。而して各各彩聲氣性有り。

(欄外朱書追記につき削除。)

故に散じて竟に統無きなり。人の知覺は。

彩は目を以て通ず

聲は耳を以て通ず

氣は鼻を以て通ず

性は舌を以て通ず

故何んとなれば。則ち耳目を假らずと雖も、而も

彩聲は則ち自から其の名を持つ

若し鼻舌を假らずんば、則ち氣性は臭味を爲す可からず、故に

一三一五三

海魚は水に入る可からず、

一三一五四

河魚は海に居る可からず、

一三一五五

酸は紅を和す、

一三一五六

香は穢を逐う、

一三一五七

蓋し清濁なる者は。精麁の分なり。

一三一五八

氣なる者は精、故に清なり、

一三一五九

質なる者は麁、故に濁なり、

一三一六〇

清なれば則ち其の氣に跡無し、

一三一六一

濁なれば則ち其の氣に狀有り、是の故に。

一三一六二

持中。機體没露の間、物は實するを以て隔て、動を以て軋む、

一三一六三

水火網縷の中、氣は蒸するを以て薰し、釀を以て畜う、故に

一三一六四

氣は清ければ則ち通ず、濁にして隔つや、彩の成る所なり、

一三一六五

機は清ければ則ち闕す、麁にして触るや、聲の成る所なり、

一三一六六

氣は清ければ則ち恬たり、麁にして釀すなり、氣の成る所なり、

一三一六七

性は清ければ則ち澹たり、麁にして言うなり、性の成る所なり、是の故に。

一三一六九

精麁網縷して。通隔闕觸。恬釀澹畜を爲す。

一三一七〇

通闕恬澹は、混として跡無し、

一三一七一

隔觸釀畜は、粲立して彩聲氣性を立す、

一三一七二

是れ境の清濁を分つ所なり。是を以て。

(I 518a)

(PB 135)



- 一三一七三 清なれば則ち天機氣物を立す、
- 一三一七四 濁なれば則ち彩聲氣性を醸す、
- 一三一七五 (復元) 然り而して色は華を發するに成る、
- 一三一七六 (復元) 聲は機に觸るるに成る、
- 一三一七七 (復元) 氣は氣に發す、
- 一三一七八 (復元) 性は質に畜う、精麿大小の成る所なり。
- 一三一七九 (復元) 故に聲色氣性は。天機氣物に醸す。
- 一三一八〇 (復元) 我の聲色臭味は。天の彩聲氣性を用うなり。
- 一三一八一 (復元) 是れ大境の最も瑣なる者にして。而して小境の最も要なる者なり。故に
- 一三一八二 (復元) 物は彩聲氣性を畜う、
- 一三一八三 (復元) 動は耳目鼻舌を開く、蓋し
- 一三一八四 (復元) 氣體なる者は清なり、
- 一三一八五 (復元) 物體なる者は濁なり、
- 一三一八六 (復元) 清は素に通じて濁隔に和さず。
- 一三一八七 (復元) 故に體氣發露して。各各自ずから彩す。
- 一三一八八 (復元) 活氣なる者は動なり、
- 一三一八九 (復元) 立體なる者は靜なり、
- 一三一九〇 (復元) 大物なる者は活動、閑す、靜體に軋せず、
- 一三一九一 復元 小物なる者は氣物軋激す、各各鳴を爲す、

一三一九一 2 復元

乾寒は浄を爲す、

一三一九一 3 復元

潤熱は穢を爲す、

一三一九五 4 復元

火性は水を蒸す、

一三一九六 5 復元

水性は火を醸す、是を以て

一三一九二

滋液は津津として性を畜う、

一三一九三

煦熱は蒸蒸として氣を起す、

一三一九四

大は則ち充たざる無し、

一三一九五

小は則ち充たざる所有り、故に

一三一九六

色は則ち有らざる所莫くして、而して彩は則ち偏に其の物に著く、

一三一九七

濁に成して、而して清に成さざるなり、

一三一九八

動は則ち有らざる所莫くして、而して聲は則ち偏に其の物に依る、

一三一九九

軋に激して、而して動に激せざるなり、

一三二〇〇

臭は熱に起る、

一三二〇一 1

味は乾を除きて潤に成る、

一三二〇一 2 復元

故に彩聲臭味。清靜寒乾の浄を除きて。而して散小の各體に成る。故に

一三二〇二

彩は清に無し、

一三二〇三

聲は闐に無し、是を以て。

一三二〇四

氣は香臭を發すの外に恬なり、

一三二〇五

性は苦甘を醸すの外に淡なり、

(PB 136)

(PB 136)

- 一三二〇六
- 一三二〇七
- 一三二〇八
- 一三二〇九
- 一三二一〇
- 一三二一一
- 一三二一二
- 一三二一三
- 一三二一四
- 一三二一五
- 一三二一六
- 一三二一七
- 一三二一八
- 一三二一九
- 一三二二〇
- 一三二二一
- 一三二二二
- 一三二二三
- 一三二二四

然れども持中の物は。其の本を天の天機氣物に資りて。

以て此の彩聲氣性を爲すなり。蓋し

精なれば則ち生化の跡を露せず、壽を悠久に引く、故に清浄なり、

麤なれば則ち生化の跡を露す、體を旦夕に換う、故に穢濁なり、

噫、清浄の府に入らずんば。則ち烏んぞ穢濁の物を辨ぜん。

生と老とを以て。新陳を分つ。

新と敗とを以て。鮮腐を分つ者は。

是れ穢濁中の淨穢なり。

(欄外追記につき削除。朱筆。)

生ずる者は必ず長ず、

滅する者は先ず老ゆ、

將に長ぜんとする者は、色澤鮮膩、之に順えば則ち其の聲は朗洞なり、

將に滅せんとする者は、色彩枯澹、之に逆えば則ち其の聲は湮鬱なり、

其の臭味に於るも亦た然り、然り而して

人なる者は萬物と竝立す。故に好惡は物と反する有り。故に

人を以て彩聲臭味を断ずる者は。人に可なるの彩聲臭味なり。故に

雀矢竜涎は、人鼻に可なり、而して

人屎壞肉は、狗口に可なり、

且つ大物の宇宙に在るは。一反一比、偶を得て居る、

(I 518b)

(PB 137)

一三三二五
 一三三二六
 一三三二七
 一三三二八
 一三三二九
 一三三三〇
 一三三三一
 一三三三二
 一三三三三
 一三三三四
 一三三三五
 一三三三六
 一三三三七
 一三三三八
 一三三三九
 一三三四〇
 一三三四一
 一三三四二
 一三三四三
 一三三四四

没體露體、
 繼を得て従う、
 而して

天氣の運は、
 日月を幹轉す、

地氣の爲は、
 事物を經營す、

偶繼するは、
 物なり、
 經緯を分つ、

運爲するは、
 氣なり、
 天地を分つ、
 然り而して

小物は此の氣物の分に依る。

反すれば則ち物を以て氣に偶す、

比すれば則ち種類相偶す、

體を没すれば、
 則ち既にする者は去り、
 將にせんとする者は來る、

體を露すれば、
 則ち前なる者は斃れ、
 後なる者は生ず、

氣は運して日月を幹轉す、

大は則ち地を以て天に偶す、
 小の偶、
 則ち植は華實を偶す、

大は則ち今を以て古に繼ぐ、
 小の繼、
 則ち植は子母を繼ぐ、

大は則ち氣を轉じ質を持す、
 小は則ち植、
 動は牝牡を偶す、

大は則ち氣を轉じ質を持す、
 小は則ち植、
 動は子母を繼ぐ、

大は則ち氣を轉じ質を持す、
 小は則ち植、
 幹を以て持す、

大は則ち氣を轉じ質を持す、
 小は則ち植、
 足を以て行く、

大は則ち神は運し精は爲す、
 小は則ち植、
 營爲、
 跡を没す、

一三二四四

一三二四五

一三二四六

一三二四七

一三二四八

一三二四九

一三二五〇

一三二五一

一三二五二

一三二五三―五四

一三二五五

一三二五六

一三二五七

一三二五八

一三二五九

一三二六〇

一三二六一

一三二六二

一三二六三

動 意技營爲す。

(PB 138)

常に一體を持する者は、體に成壞無し、日月土石は皆な然り、

先後に體を換する者は、體に成壞有り、雲雨動植は同く然り、

麤より之を觀れば體を常にする者は、生化せず、

體を換える者にして、而して生化を露す、

(I 519a)

精より之を觀れば同一生化、没露、跡を異にするに過ぎず、是の故に。

宇宙は衰衰たり、

覆載は攸攸たり、

雲雨は倏忽たり、

動植は斯須たり、亦た途の異なるに非ざるなり。故に。

雲雷雨雪、或いは聚り或いは散ず、未だ天に在る者の精なるに及ばず、

艸木鳥獸、或いは結び或いは解く、未だ地を爲す者の實なるに及ばず、

大物は無窮なり、

小物は有窮なり、

經緯は同じく然り、是を以て。

物の將に結ばんとするや、氣は淳乎として興る、

其の將に盡きんとするや、體は頽乎として壞る、故に

上にして雲雷雨雪なり、物を水燥に資る、

下にして艸木鳥獸なり、物を土石に資る、

- 一三二六四
- 一三二六五
- 一三二六六
- 一三二六七
- 一三二六八
- 一三二六九
- 一三二七〇
- 一三二七一
- 一三二七二
- 一三二七三
- 一三二七四
- 一三二七五
- 一三二七六
- 一三二七七
- 一三二七八
- 一三二七九
- 一三二八〇
- 一三二八一
- 一三二八二

明暗は天地を上うへに於おて分わかつ、
 水土は天地を下したに於おいて分わかつ、

天地は愈いよいよ分わかる、

生物は愈いよいよ蕃しげる、

艸木鳥獸は、燥居そうきよす、

魚龍藻樹は、水居すいきよす、

動植の天地を有うするは、

夫それ
 氣液骨肉を物ぶつにす、

神靈感運を神しんにす、

偶繼運爲に依よる、

彩聲臭味を用もちう、

植は有意ういの文ぶんを没ぼつす、

動は有意ういの文ぶんを露ろす、

質實しつじつの地ちを同どうするを以もつて、其その物ぶつを爲いするや同どうなり、

水燥すいそうの居きよを隔へだてるを以もつて、其その生せいを成せいするや異いなり、故ゆえに。

毛羽もううは氣中きちゆうに生しょうじて、而しかして氣きに活かつす、水すいを飲のむと雖いえども、而しかも水すいに死しす、

鱗甲りんこうは水中すいちゆうに生しょうじて、而しかして水すいに活かつす、氣きを噉げんすと雖いえども、而しかも氣きに死しす、

跡せきは反はんすと雖いえども、哮喘こきゆうと納のう。飛走游潛ひそうゆうせん。其その理りは一いちなり。

理りは一いちなりと雖いえども、物ぶつは則すなわち相あい隔へだつ。

資とる所ところありて竝へいりつ立たつするなり。

- 一三二八三
- 一三二八四
- 一三二八五
- 一三二八六
- 一三二八七
- 一三二八八
- 一三二八九
- 一三二九〇
- 一三二九一
- 一三二九二
- 一三二九三
- 一三二九四
- 一三二九五
- 一三二九六
- 一三二九七
- 一三二九八
- 一三二九九
- 一三三〇〇
- 一三三〇一

變せざれば則ち常ならず、
 常ならざれば則ち變せず、

明は往き暗は來る、

寒は謝し暑は至す、

常なる者も能く變ず、

變なる者も能く常す、

變ずる者よりして之を推せば、則ち皆な變なり、

常なる者よりして之を推せば、則ち皆な常なり、

惟だ

往く者を常とすれば、則ち來る者は變なり、

來る者を常とすれば、則ち往く者は變なり、

魚の水に潛む、

鳥の天に翔く、

一は常なれば則ち一は變ず。故に

植は本を下にし末を上にする、

動は本を上にし末を下にする、

跡は則ち反すと雖も。而も名は則ち資る所有り。

反すれば則ち一を分つ、

同なれば則ち異を合す、

天地を成す者は一なり、

(PB 140)

- 一三三三〇二
- 一三三三〇三
- 一三三三〇四
- 一三三三〇五
- 一三三三〇六
- 一三三三〇七
- 一三三三〇八
- 一三三三〇九
- 一三三三一〇
- 一三三三一^{*}一
- 一三三三一二
- 一三三三一三
- 一三三三一四
- 一三三三一五^{*}
- 一三三三一六
- 一三三三一七
- 一三三三一八
- 一三三三一九
- 一三三三二〇

天地に成る者は各なり、

一なる者は此を有す、

各なる者は此に立す、

大の有する所は、則ち小の資る所なり、

各の立する所は、則ち一の成る所なり、故に

大物は萬物を有す、

萬物は 大物に異なる、

天地を成す者は一なり、

天地に成る者は各なり、故に

機體象質、聲聲氣性は、天地の成具なり、

氣液骨肉、心性爲技は、人の成具なり、

成具は。則ち一を闕けば則ち其の物に成らざる有り。

天地に成ること有る者は。

譬えば鳥と我との如く。松と竹との如し。

彼を闕くと雖も。而も此に於て已に成る。故に

彼我は各おの其の天地を成し。此の大物中に遊ぶ。

彼此は生を異にす、故に其の物や立す、

彼此は交接す、故に其の事や活す、

夫れ人なる者は。萬物中の一物なり、

一三三三二一

一三三三二二

一三三三二三

一三三三二四

一三三三二五

一三三三二六

一三三三二七

一三三三二八

一三三三二九

一三三三三〇

* 一三三三三一

一三三三三二

一三三三三三

一三三三三四

一三三三三五

一三三三三六

一三三三三七

一三三三三八

一三三三三九

一三三三四〇

各氣中の一氣なり、是を以て

天地暨物は。我と並び立つ

我と並び行く

此の如きの天地に立す

此の如きの天神に活す 故に

其の體は則ち岐然たり。

氣を彩聲氣性に交す、

質を繼偶運爲に接す、

其の神は則ち淳乎として本を保運化持に運し、

神を情慾意智の氣に爲すを用す、

眇眇の體に局す、

眇眇の智に囿す、 夫の意なる者は。

索に巧にして、得に拙なり、

度に精にして、通に麓なり、是の故に。

意を以て物を索む、索めて得ざれば 則ち疑う、

智を以て事を度る、度りて通ぜざれば 則ち惑う、

失得有亡は之を累る。

憂悲苦歎は之に繋る。

己を有するに於て隔たる、

- 一三三四一
- 一三三四二
- 一三三四三
- 一三三四四
- 一三三四五
- 一三三四六
- 一三三四七
- 一三三四八
- 一三三四九
- 一三三五〇
- 一三三五一
- 一三三五二
- * 一三三五三
- 一三三五四
- 一三三五五
- 一三三五六
- 一三三五七
- 一三三五八
- 一三三五九

意を有するに於て塞がる、

小物を以て大物に置かず、

有意を以て神爲に任せず、

終に窺察して以て天地に觀る。

幽明は、氣なり、

有無は、物なり、

幽明を物に尋ね、

有無を氣に繹ぬるも、遠し。

幽明を氣に求め、

有無を物に繹ね、

有意を無意に於て通じ、

無意を有意に於て體すれば、

則ち相い換る者に何ぞ隔てん。

已に生を此に寓す。然り而して

由りて來る所を知らず、

往きて變る所を測らず、

眇眇を須臾に寄す、

耿耿を攸久に窮めんと欲す、
啻に其の死後の知る可からざるのみならず、

- 一三三六〇
- 一三三六一
- 一三三六二
- 一三三六三
- 一三三六四
- 一三三六五
- 一三三六六
- 一三三六七
- 一三三六八
- 一三三六九
- 一三三七〇
- 一三三七一
- 一三三七二
- 一三三七三
- 一三三七四
- 一三三七五
- 一三三七六
- 一三三七七
- 一三三七八

生前も亦た之を如何ともする無し、
 啻に生前死後の然るにあらざ、
 此の生も亦た知る可からざるなり、蓋し
 此の生爲る。已に其の寓を有す、
 亦た其の知を智にす、
 其の有は、則ち實に其の有なり、
 其の智は、則ち實に其の智なり、
 知らず。素より有して、而して今も亦た之を有すか、
 素より知りて、而して今も亦た之を知るか、
 今始めて其の寓を得て、以て之を有すか、
 今始めて其の智を得て、以て之を知るか、
 既に其の有を有す、
 既に其の智を智にす、是に於て。
 有の有せざる所を疑う、
 智の知らざる所に惑う、
 無なる者は、有の分外なり、
 幽なる者は、明の分外なり、而して
 幽明は有無に非ず、
 有無は幽明に非ず、

- 一三三七九
- 一三三八〇
- 一三三八一
- 一三三八二
- 一三三八三
- 一三三八四
- 一三三八五
- 一三三八六
- 一三三八七
- 一三三八八
- 一三三八九
- 一三三九〇
- 一三三九一
- 一三三九二
- 一三三九三―九七
- 一三三九八
- 一三三九九
- 一三四〇〇
- 一三四〇一

外なる者は能く内と反す、

猶お晝の夜を外にし、

夜の晝を外にするがごとし、今

明を執りて以て幽を窺う、

有を執りて以て無を思う、

猶お晝の色を執りて、以て夜の若んが物を蔽うと疑い、

夜の色を執りて、以て晝の若んが明を通ずと疑うがごとし、又た

猶お目を閉じて以て明の所在を尋ね、

炬を乗りて以て暗の所在を探るがごとし、故に

明中に暗を尋ねば、姑く見る所の者を屏けて、

思いを冥晦の中に致し、以て暗を知るに如かず、

暗を知らざれば、則ち其の明を知るも亦た審かならず、

暗中に明を探れば、姑く晦ます所の者を捨て、

思いを明朗の中に致し、以て明を知るべきなり、

(写本からの転記につき削除。)

明を知らざれば、則ち其の暗を知るも亦た審かならず、

明中 明を屏けて暗に通ず、

暗中 暗を忘れて明に通ず、
これを融通と謂う。

- 一三四〇二
- 一三四〇三
- 一三四〇四
- 一三四〇五
- 一三四〇六
- 一三四〇七
- 一三四〇八
- 一三四〇九
- 一三四一〇
- 一三四一一
- 一三四一二
- 一三四一三
- 一三四一四
- 一三四一五
- 一三四一六
- 一三四一七
- 一三四一八
- 一三四一九
- 一三四二〇

明中 思いを暗に致す、其の暗を以て、能く我の在る所の明を知る、
 暗中 思いを明に致す、其の明を以て、能く我の在る所の暗を知る、
 之を反観と謂う。

猶お鏡を鑑るの我が身を身の外に體し。

身の外なる者を以て反観すれば。則ち彼に通じて我を知るがごとし。

通ぜざれば則ち鏡に體すること能わず。

鏡に體すること能わざれば。則ち以て己を知る無きなり。

有を以て無に體し、無を以て有を反観し、

明を以て幽に體し、幽を以て明を反観せば、

則ち何の通に病むことか之れ有らん、

今 有を執りて以て無を窺う、

明を執りて以て幽を窺う、

質を幽明に尋ぬ、

氣を有無に求む、

猶お目を閉じて明を追い、

炬を乗りて暗を追うがごとし、

釣竿は狐兔を捕うの具に非ず、

瓦缶は鳳鳴を爲すの器に非ず、

苦なりと雖も而も無益なり。

(PB 143)

(I 520b)

- 一三四二一
- 一三四二二
- 一三四二三
- 一三四二四
- 一三四二五
- 一三四二六
- 一三四二七
- 一三四二八
- 一三四二九
- 一三四三〇
- 一三四三一
- 一三四三二
- 一三四三三
- 一三四三四
- 一三四三五
- 一三四三六
- 一三四三七
- 一三四三八
- 一三四三九

諸を一氣に結ぶ、

諸を一氣に解く、

物の天地を有するは、猶お

車の輪輻を有するがごとし、

車は輪輻無ければ、則ち行く可からず、

物は天地無ければ、則ち立つ可からず、

物の氣を有するは、猶お

車の御者を有するがごとし、

御無ければ則ち車は用を爲さず、

氣無ければ則ち物は立つこと有らず、

一氣の應用。猶お心の喜怒哀樂に痕無く。而して

應接盡きること無きがごとし。是を以て。

膏梁を食する者は、其の人や肥ゆ、

糞壤を培する者は、其の苗や長ず、而して

膏梁は人の肌膚に非ず、

糞壤は苗の枝葉に非ず、

惟だ相い依るの間に。彼此の給資するを見る。然りと雖も。

人は死して蘇る可からず、

物は化して收る可からず、

一三四四〇 生化燦立。唯だ混有の一を有す。則ち
 一三四四一 解も亦た一氣なり、
 一三四四二 結も亦た一氣なり、
 一三四四三 生は之を得るに非ず、
 一三四四四 死は之を歸するに非ず、
 一三四四五 終を始に反すれば、則ち洋洋乎たり、
 一三四四六 前後を今に求むれば、則ち滾滾然たり、
 一三四四七 燦と混と、其の中に機す、
 一三四四八 幽と明と、其の間に跡す、
 一三四四九 神明何物ぞ。一肉団の氣は一結物なり。
 一三四五〇 其の智通を天の氣感に還す。
 一三四五一 忘して通じ。通じて化す。
 一三四五二 生ずれば則ち生ず、
 一三四五三 化すれば則ち化す、
 一三四五四* 惟だ其れ然るのみ。孰れか之を蔽塞せん。
 一三四五五 生ずる者は生ず、故に之を生と謂う、
 一三四五六 化する者は化す、故に之を化と謂う、
 一三四五七* 化する者は、生に到らざるして化す、
 一三四五八 生ずる者は、化に行われずして生ず、

- 一三四五九
- 一三四六〇
- 一三四六一
- 一三四六二
- 一三四六三
- 一三四六四
- 一三四六五
- 一三四六六
- 一三四六七

生は化を爲す可からず、
 化は生を爲す可からず、故に
 生化は迭いに行わるるを得て。而して同じく行わるるを得ず。
 動は子を生じ、植は種を生じ、
 動は息む、植は斃る、
 收る可ければ則ち化に非ず、
 已む可ければ則ち生に非ず、
 生ずる者は必ず化す、其の一なる所なり、
 生は必ず化に非ず、其の二なる所なり、
 聯綿として已まず、
 陸續として收らず、

(PB 145, I 521a)